関西大学『独逸文学』第 62 号 2018年 3 月

関西大学独逸文学会研究発表概要
（第110回研究発表会）

シンポジウム：ドイツ語と聖書―さまざまな観点からのアプローチ

はじめに

工藤　康弘

聖書はその成立以降、中世から近現代に至るまで、時代の荒波をものともせずに、永遠のベストセラーであり続けている。旧約聖書はヘブライ語（ヘブル語）、新約聖書はギリシャ語で書かれているが、時代を経るにつれ、そのときどきのすぐれた知識人により、多くの言語に翻訳されてきた。これがときに書き言葉を発展させる原動力にもなった。また聖書は言語研究にとっても格好の資料を提供する。時間軸に沿って考察すれば、ある言語の通時的変化を追うことができる。また異なる言語による聖書翻訳を比較すれば、言語の比較研究が可能となる。

本シンポジウムでは主として言語に力点を置きながら、聖書を利用した研究の可能性を探った。芝田豊彦（本学教授）は旧約聖書を資料として、完了・未完了の相（アスペクト）を重視するヘブル語（セム語）の表現が印欧語の一つであるドイツ語の時制（テンス）にどのように翻訳されるかを探った。永沼琴子（本学大学院博士前期課程在学）は Luther 聖書（1545）と Piscator 聖書（1606）を資料として句読点、特にヴィルゲルと呼ばれる斜線がどのような機能を果たしているのかを、現代語のコンマ、ピリオド、コロン、セミコロンといった句読点と比較しながら考察した。工藤康弘（本学教授）は欽定英訳聖書（1611）における英語が現代英語に比べ、多くの点でドイツ語に近い特徴を持っていることを

示した。なお、司会進行は工藤が担当した。

（1） ヘブル語聖書と種々のドイツ語訳聖書

芝田　豊彦

ドイツ語の時制（過去・現在・未来）と異なり、ヘブル語は完了・未完了の相で事象を見ていく。たしかにヘブル語の完了も過去を表わすことが多いが、必ず成就すると期待される未来の行為にも完了を用いることができる。ここではヘブル語完了が時制的には未来を表わす例として、イザヤ書９章１節（預言者の預言）と創世記15章18節（神の約束）を紹介する。

イザヤ書９章１節のドイツ語訳は、未来形または現在形で訳されるのがふつうである。「闇のなかを歩んでいる民は大いなる光を見るであろう」ということになる。また創世記15章18節は、ギリシャ語訳（70人訳）が未来形で訳しているが、ドイツ語訳では現在形か助動詞 wollen を用いて訳すものが多い。しかし、Buber と Rosenzweig による旧約聖書のドイツ語訳と Elberfelder Bibel では文字どおり完了形で訳され、まだ生まれてもいないアブラハムの子孫に神はすでに土地を与えたことになり、結果として斬新な訳になっている。

次に未完了について述べたい。未完了は、３人称、場合によっては２人称の命令形としても使うことができる。ところで十戒の「汝殺すなかれ」は、ルター聖書では Du sollst nicht töten. であり、現代のドイツ語諸訳ではルター聖書のおおきな影響を反映して、ほとんど例外なくこれに準じた訳し方をしている。しかし、これはヘブル語では未完了で表わされるので、先の Elberfelder Bibel は別の訳の可能性として、Du wirst nicht töten.（あなたは殺したりしない）と訳し得ることを脚注で示している。

そのことに関して関根正雄は、さらに一歩進めて次のように言っている。「十戒の否定形を禁止命令ととかく取りがちだが、ヘブライ語で禁止命令は別の形を使う。十戒の否定形は直訳すれば『君は…することはない』となる。出エジプト以来の神の恩恵に答え、イスラエルが行なう

ことのありえない項目をあげているのである。これはアルト以来純粋に学問的な立場からいわれていることである」。当該の十戒はあくまで「あなたは殺したりしない」という意味が根底にあり、二次的に禁止命令の意味が派生してくる、ということである。

Albrecht Goes（1908-2000）の作品『カッツに関する件』（Das mit Katz, 1984）では、十戒がヘブル語（ローマ字音写）で引用され、そのドイツ語訳がヘブル語の直訳になっている。すなわち、ロー・ティルツァフというヘブル語に対して、Du wirst nicht töten.（あなたは殺したりしない）というドイツ語訳が与えられるのである。

小説の主人公で副牧師でもある将校は、ユダヤ人同胞を裏切った或るユダヤ人の部屋に乗り込んで、十戒のロー・ティルツァフ――「あなたは殺したりしない」（Du wirst nicht töten.）に対して、ロー・エルツァフ――「私は殺したりしない」（Ich werde nicht töten.）と誓わせる。そして場合によってそのユダヤ人を射殺することを考えていた主人公も、ともにこの誓いを唱和するのである。ロー・エルツァフのドイツ語訳は未来形１人称であるが、ドイツ語の未来形１人称には意志のニュアンスが出てくるので、強制されるからでなく、意志を持って「私は殺したりしない」ということになる。このようにゲースはあえてヘブル語を用い、それにぴったりのドイツ語訳をあげることによって、ヘブル語本来の意味を提示し得たのであった。

（２） 句読点に関する一考察
― Luther 聖書（1545）と Piscator 聖書（1606）の比較―

永沼　琴子

ルター聖書の原文には現代ドイツ語にはない句読点がある。そこにはコンマがなく、斜線が多用されている。この斜線はヴィルゲルと呼ばれ、16世紀のテキストに多く現れる。用法は多岐にわたり、現代で言うところのコンマやコロン、そしてピリオドにあたるものもあれば、現代では使われない箇所に現れる場合もある。紀伊國屋『ドイツ言語学辞典』では、この現代語にない用法を「息継ぎ」のヴィルゲルとしている。すな

わちこのヴィルゲルは、朗読の際に読みやすくなるようにと当時の印刷業者が挿入したものであり、現代ドイツ語と違って任意に適当な箇所に置かれているという意味では、日本語の読点の使い方を思い起こさせる。

本発表では Luther 聖書（1545）と、ほぼ同時代の Piscator 聖書（1606）を用い、マルコ福音書第１章において、句読点の一つであるヴィルゲルがどの程度文法的な原理を意識して使用されているのか、あるいはそうした規則性を持たず、単なる「息継ぎ」の記号として用いられているのかということ、加えて現代の用法に分類できない「息継ぎ」のヴィルゲルがどのような箇所で用いられる傾向があるのかということを取り扱った。

例を挙げると、マルコの福音書第１章１節がルター聖書（1545）では Djs ist der anfang des Euangelij / von Jhesu Christo / dem Son Gottes /（神の子イエス・キリストの福音の初め。）である一方で、ピスカートア聖書では Djs ist der anfang des Evangelii Jesu Christi / des sohns Gottes. となっている。ルター聖書の von Jhesu Christo の前にあるヴィルゲル［/］について、現代の句読法では前置詞の前に句読点を置くという用法はないことから、このヴィルゲルは「息継ぎ」にあたるものと考えられる。一方、ルター聖書の dem Son Gottes とピスカートア聖書の des sohns Gottes の前にそれぞれ置かれたヴィルゲルは、同格を表すためのコンマの代用であると思われる。

このように様々な用法を持つヴィルゲルは、マルコの福音書第１章において、その大半がコンマの用法に準じるものであり、文法的単位とは考えられない箇所に置かれているものは数える程度しか見られなかった。

（３） 欽定英訳聖書（1611）におけるドイツ語的特徴

工藤　康弘

１　はじめに

英語は歴史的にフランス語の影響を受け、大きく変貌して今日に至っている。本来兄弟の言語とも言えるドイツ語と英語であるが、ドイツ語

を学び始めた人にとって、類似点よりも相違点のほうを強く感じるのではないだろうか。しかしシェークスピアと同時代にイギリスで出版された欽定英訳聖書を読むと、そうした印象は一変する。本発表では欽定英訳聖書からさまざまな言語現象を取り上げ、そのドイツ語的な特徴を考察した。

2　形態論

まず2人称代名詞を挙げると、単数形が thou（主格）と thee（目的格）、複数形が yee（主格）と you（目的格）である。これは現代ドイツ語の du と ihr に相当するが、単数複数の別は同時にいわゆる親称と敬称をも表わしているようである。

動詞に目を向けると、3人称単数現在形として taketh, saith、2人称単数現在形として commest といった語形が見られる。また強変化動詞の過去形として brake, spake があり、これはドイツ語の brach, sprach に相当する。

3　統語論

3.1　助動詞 do に関して、今日的な用法はまだ確立されていない。why take ye thought for raiment?（なぜ衣服のことで思い悩むのか）のように、つまり現代ドイツ語のように do を用いないこともあれば、they did all eat（彼らは全員食べた）のように、否定や疑問を伴わない文に do が使われることがある。

3.2　部分的ではあるが、以下の文のように定動詞第2位の原理が働いている。All these things will I giue thee（これらをみなお前に与えよう）定動詞第2位が起こる場合と起こらない場合の条件については、今後の考察にゆだねたい。

3.3　移動や変化を表わす動詞の完了形には、以下のように be 動詞が用いられる。I am not come to destroy, but to fulfill（私が来たのは破壊するためではなく、実現するためである）

3.4　英語は歴史的に再帰表現を縮小させてきたが、欽定英訳聖書にはまだ多くの再帰表現が見られる。2つ例を挙げる。hee withdrew himelfe from thence（彼はそこから立ち去った）/ Judas［…］repented himselfe（ユ

ダは後悔した）

3.5　欽定英訳聖書では仮定法（接続法）が多用されるが、その用法は必ずしもドイツ語に相応したものではない。特に目立つのは if や till に導かれた副文に現れる仮定法現在（接続法１式）である。If thou be the sonne of God（もしお前が神の子なら）/ till the Sonne of man be come（人の子が来るまで）

まとめ

ドイツ語の学習者は英語との違いにとまどいを覚えることが多いが、本発表は400年前の英語がより多くのドイツ語的特徴を有していることを示した。なお、接続法と話法の助動詞が複雑にからみあった目的文は興味深い現象ながら、時間の関係で触れなかった。